

孔子の思想について（上）

高 橋 庸 一 郎

中國大陸における最も古い文明は、エジプト文明、インダス文明とともに三大文明の一つとされる黄河文明である。しかしそれには近年たびたび疑問が提示されるようになった。尤もそれは何も「近年」ではなく、新中国成立以降、中国の学者達は最初から従来の定説に疑問を提出していたのであった。その最も大きな理由は、黄河文明の発祥の地である黄河中流域、上流域は、そこに足を運んだ者のみが理解できることであるが、そこは、最も古く文明が起るに足るはあまりにも劣悪な自然条件の地でありすぎることである。そのほとりに、人をも寄せ付けないような、あたかも激しくのたつ巨大な龍の如き黄河の運んでくる大量の黄土に被われた黄色い大地が有り、そこは日照りが少しでも長引けば、乾燥のあまり網の目のようなひび割れが縦横に走り、凡ての作物は小さな枯れた草の固まりとなってしまうのである。また雨が、少し多めに降っただけで、分厚い黄土層は黄色い泥の海と変わり、そこ等中に黄色い

水路が無数にできやがてそれが一つの大きな流れとなって、近隣に建てられている日干し煉瓦の家屋などは瞬時の内に溶解させ吞みこんでいくばかりでなく、人間でも、藁や布、ゴムというような履物を履いている場合は、その底に重たくなる程の泥の塊が付着して、歩行に難渋するほどだからである。このように生産性の極めてよくない大地に何故人間がそんなに早く文明を築くことになったのか、勿論文明が「発展」するには、様々な自然条件が整っていないければならないであろうが、文明の「発祥」ということになる、そうした条件の定式があるわけでは無いということは理解できる。しかし地平線を同じくするその大地の上には、もっともつと良好な条件の地があるという場合に、劣悪なほうにのみ文明が発祥し、良好なほうには発祥しないというのは、あまりにも理にかなっていないというわけである。そういう理由から中国の学者達は、長江流域にも、黄河文明より早くから、黄河文明同等か、或いは黄河文明よりレベルの高い文明が栄えていたに違いないと考え、ここ半世紀に亘って探索を続けてきたのであった。その結果が青蓮溝文明、河母渡

文明、良儲文明などの発見であり、またこれは長江からは少し離れてはいるが、三星堆文明等の発掘なのである。

以上見てきた中国の南北二種類の文明を、北方文明、南方文明と名付けるとすると、孔子の属した文明大地は言うまでも無く北方である。尤も、孔子が活躍した魯の国は北方とはいえないが、やや南より現在の山東省の西部の地であり、どちらかというとな方でも、その大量の黄土が降り積もっているわけではない、寧ろ緑豊かな豊饒の地であるといつてよい。しかし孔子をとり巻いた世界即ち魯の国を取り巻いていた世界は、必ずしも魯と同じように富裕なところばかりではなかったはずである。当時の諸記録文献には、『尚書』にしる、『春秋』、『春秋左氏伝』にしる、或いは『国語』にしるあまり一般の庶民の暮らしなどについてはかかれていないが、孔子が愛してやまなかった『詩経』には当時の地方における庶民の貧しく苦しい暮らし振りが、ある程度表現されている。春秋期や戦国期において、弱肉強食の苛烈な侵略と攻防が繰り返されたのは、決して単なる国主たちの権力欲によるものばかりではない。彼らを支える一般庶民層の生活を貧困を少しでも余裕あるものにして、権力者自らが、より裕福に、そして軍事的により強大になる為に、そして最終的には自らが所謂単なる覇者であることを超えた、諸部族国家を統一支配する王者とのし上がる為の争いの結果でもあったことは言を待たない。つまり上古から春秋戦国期にかけての時代とは、生産力の極めて低い広大な大地の上での、上から下に至るまでの富と権力の獲得の為の争いであつたと言つことができるであらう。もう一

歩踏み込んで言うなら、強い武力によって権力を得た者のみが、最終目標である富を得ることができたのであつた。

孔子の唱えた最も基本的な徳目は仁である。この仁とはいつたい如何なるものか、については古来様々な文人士学者達が、様々な方面から解釈、注釈をものし続けてきたし、また今尚、そしてこれからもい続けていくに違いないが、今ここで些か乱暴ではあるが、簡単に一言で「他者を理解して譲ること」とするならば、孔子が当時この徳を唱えた理由は極めて明確に理解できる。つまり少ない生産物を、多くの人間が武力でその獲得の為に殺しあえば、当時の中原に住む人々は、相打ち合つて死に絶えるか、また国家で言うならば、当時の中原国家群がその少ない生産物の獲得の為に武力で相争えば、相打ち合つて最後には春秋国家群全滅の憂き目に会つのみである。中国大陸北方の劣悪な環境という広範囲な視点から考えると、孔子が仁を唱えた理由はここにあると思われる。それはまさしく中原に住む人々全体の生き残りをかけた徳目であり、その提唱であつたと言つことが出来るであらう。孔子の思想の前提とその始まりはここにあるということこそ、確認しておかねばならないと思うのである。

孔子生魯昌平郷陬邑。其先宋人也。曰孔防叔。防叔生伯夏。伯夏生叔梁紇。紇與顔氏女野合而生孔子、禱於尼丘得孔子。

魯襄公二十二年而孔子生。生而首上圩頂、故因名曰丘云。字仲尼、姓孔氏。

孔子魯の昌平郷、陬邑に生る。其の先は宋の人なり、孔防叔と曰ふ。防叔、伯夏を生み、伯夏は叔梁紇を生む。紇は顔氏の女と野合して孔子を生み、尼丘に禱りて孔子を得たり。魯襄公二十二年にして孔子生る。生れて、首上、圩頂なり、故に因りて名付けて丘と曰ふ。字は仲尼、姓は孔氏。

これは『史記・孔子世家』の始めの部分である。ここで注目したのは、孔子の「先宋人也」についてである。同じ『史記・殷本紀』に周の武王が殷の紂王を滅ぼした後、殷の後を継がせて建てたのが宋である。索隠には、

家語、孔子、宋微子之後、宋襄公生弗父何、以讓弟厲公、弗父何生宋父周、周生世子勝、勝生正考父、考父生孔父嘉、五世親盡、別爲公族、姓孔氏。孔父生子木金父、金父生宰夷。宰夷生防叔、畏華氏之逼而奔魯、故孔氏爲魯人也。

家語、孔子は、宋の微子の後なり。宋の襄公は弗父何を生み、以つて弟の厲公に讓る。弗父何は宋父周を生み、周は世子勝を生み、勝は正考父を生み、考父は孔父嘉を生み、五世の親盡きて、別に公族を爲り、孔氏を姓とす。孔父は子木金父を生み、金父は宰夷を生み、宰夷は防叔を生み、華氏の逼を畏れて魯に奔く、故に孔氏は魯の人と爲るなり。

とあり、宋の微子の子孫であるとしている。微子は、『殷本紀』で何度も紂王をいさめたが聞き入れられず、大師や少師と謀つて殷

から逃亡し、後に周王から宋に封ぜられたのである。白川静の考証によれば、殷周革命の後、殷の後裔たちは宋氏や杞氏となつて中原に散らばつたが、周に繋がる人々からはさげすまれて、一定の土地に定住することなく放浪して歩くうちに、商人（殷人）と呼ばれ、現実に商業を生業として生きざるを得なかつたようである。いずれにせよ彼らは、他の人々と同等には世に受け入れられず、ある種の差別の中で生きることを余儀なくされたようである。

次に注目したいのは、「野合而生孔子」の語である。これについて索隠は次のように述べている。

家語云、梁紇娶魯之施氏、生九女。其妾生孟皮、孟皮病足、乃求婚於顔氏微在、從父命爲婚。其文甚明。今此云野合者、蓋謂梁紇老而微在少、非當壯室初笄之禮、故云野合、謂不合禮儀。故論語云、野哉由也、又先進於禮樂、野人也、皆言野者是

不合禮耳。家語に云ふ、梁紇は魯の施氏を娶り、九女を生む。其の妾孟皮を生み、孟皮は足を病ひ、乃ち婚を顔氏の微在に求め、父命に従ひて婚を爲す。其の文甚だ明なり。今此に野合と云ふは、蓋し梁紇老にして、微在は少く、壯室として被笄の禮に當るに非らざるを謂ひ、故に野合と云ふ。禮儀に合わざるを謂ふなり。故に論語に云ふ、野なるかな由や、又、禮樂より先して進むは、野人なりと、皆、野と言ふは、是れ禮に合わざるのみ。

即ち、孔子の父親の梁紇は魯の女性と結婚して既に九人の娘が生まれていた、しかしみんな女だつた為に、妾を持つて一男を得

たが、その子は足が悪かったので、今度は顔氏の娘の徴在と結婚した、というのである。言外に「跡取としての男の子を得る為に」の意味がこめられている。そしてこの注には、「其文甚明」という意味深長な語が付け加えられている。これはかなり言い訳がましい一句のように受け取れる。つまり孔子の父親は正当な理由によって、正式な妻以外の女と婚姻を結んだのであって、これは礼に合っていない訳ではない。ということをおうとしていくかのようである。

そしてこの『家語』の文言は極めてはっきりしているものであるから、非礼であるかどうか等を疑う余地はない、というのが、「其文甚明」の語である。そして、もし非礼と言うならば、実は他の点にあって、それが「野合」であるというわけである。この結婚が「野合」と司馬遷が言っている理由は、梁紇が年老いていたのに対して、相手の徴在は若くて、大人の正式な結婚としては礼に合わないからであるというのである。そして「野」の例として、『論語』から引用しているのであるが、それらはこの場合のような婚姻についてのことではなく、一般的な意味での儀礼に合わない事についての例である。後世の注釈者たちが、偉大な孔子のみならず、その身近な環境にまで心を配って、その権威を損なわないように気を使っていることは重々理解できるのであるが、それが理解できるだけに、このあたりの例の出し方には言い訳がましいものを感じられて仕方が無いのである。『正義』は更に丁寧な次のように付け足している。

男八月生齒、八歳毀齒、二八十六陽道通、八八六十四陽道絶。女七月生齒、七歳毀齒、二七十四陰道通、七七四十九

陰道絶。婚姻此過者、皆爲野合。……………婚過六十四矣。

男は八月にして齒を生じ、八歳にして齒を毀つ、二八十六にして陽道通じ、八八六十四にして陽道絶つ。女は七月にして齒生じ、七歳にして齒を毀ち、二七十四にして陰道通じ、七七四十九にして陰道絶つ。婚姻此を過ぎれば、皆野合と爲す。……………婚するは六十四を過ぎたるなり。

「野合」の野とは、「礼に合わない」ということを表していることに間違ひは無いであろうが、それは恐らく年齢が違いすぎていることが礼に合わないと言つのではない。だから注釈者も「蓋し」ということで、「これは推量に過ぎないが」という断わりをつけているのである。しかも注釈者は、年齢が違いすぎた結婚は礼に合わない、それは「野合」というのであるという例を他に見付けることができなかつたから、些かずれてはいるが、せめて『論語』から合わないながらも例を引いてきたのである。それでは「野合」とはいったい如何なる意味であるかといえ、恐らくそれは「正式な結婚ではない」ということを表しているのである。「野」は「家」から離れているという意味である。つまり正式な家と家との結婚ではなかつたのである。ということは、それでは孔子は所謂私生児か、ということになるが、必ずしもそうとはかりはいえない。先に述べた如く、梁紇の父親は「畏華氏之逼」て、魯に逃げてきた身分である。そのために社会的な差別を受けて、正式な婚姻を行うことが許されない身分であつたかも知れないのである。その点から言えば、孔子の第一の徳目である「仁」は、恐らくそうした社会的な底辺にある者の

みが獲得できる思考に根ざしていると言えなくも無いであろう。その点は後に詳述するつもりであるが、孔子の思想の基盤になるという点で重要な認識である。

また本文には、孔子は「生まれて首上圩頂」とあり、これについて『索隱』は、

圩頂言頂上竄也、故孔子頂如反宇。反宇者、若屋宇之反、中低而四傍高也。

圩頂とは、頂上の竄なるを言つなり、故に孔子の頂は反宇の如し。反宇とは、屋宇の反りたるが若くして、中は低く、四傍が高きなり。と述べている。「竄」とは「いびつ」なことを言つ語である。即ち注によれば、孔子の頭は、頭頂の真中がへこんでいて周りが盛りあがっていて、建物の屋根を裏返しにしたような形をしていたと言うのである。これは古代のことで、伝承上は不正確なことが多いのは当然であるが、それにしても、頭のこの形は他に例を見ない不思議な形である。もしこれが本当なら、他にも、例えば『論語』等にもそのことが記述として残っていて然るべきである。恐らくこれは孔子がかぶっていたかぶりものの形を言つたものであろう。そのかぶりものの形がそのまま孔子の頭の形として言い伝えられたものであろう。『論語』などにそのことが見えないということは、孔子がそのようなかぶりものをかぶっていたというのは、世に出る前のことなのであろう。即ち孔子は何らかの理由によって幼児から壮年に至る前くらいまで、そうした、普通の人はかぶることの無い、特殊なかぶりものをかぶらなければならないような、特殊な職業について

ていたか、或いは特殊な身分に属していたのではなかつたか。それではその特殊な職業とか、身分とかいうものは、いったい何であつたのかという点になるとそれを詳かにすることは極めて困難であるが、とりあえず孔子はそうした特殊な仕事、階層に関連していたといふことは確認できるのではなかつたか。

丘生而叔梁紇死、葬於防山。防山在魯東、由是孔子疑其父墓處、母諱之也。孔子爲兒嬉戲、常陳俎豆、設禮容。孔子母死、乃殯五父之衢、蓋其慎也。邾人輓父之母誨孔子父墓、然後往合葬於防焉。

丘生れて叔梁紇死す、防山に葬むる。防山は魯の東に在り、是に由り孔子其の父の墓處を疑ふ。母之を諱むなり。孔子兒嬉の戲を爲すに、常に俎豆を陳べ、禮容を設く。孔の母死に、乃ち五父之衢に殯りす。蓋し其れ慎しむなり。邾人輓父之母、孔子に父の墓を誨ふ。然して後に往きて防に合葬す。

これは『史記』の最初に引用したところに続く部分である。ここで述べられている事の一つは、孔子の父親が亡くなり、防山に葬られたが、孔子は父親の墓が何処にあるのか知らなかつたというのである。またその理由は、母親が父の墓が何処にあるかを孔子に知られることを嫌つて言わなかつたからだといふ。これについて『索隱』は、

謂孔子少孤、不的知父墳處、非謂不知其塋地。微在笄年適於梁紇、無幾而老死、是少寡、蓋以爲嫌、不從送葬、故不知墳處、遂不告耳、非諱之也。

孔子少くして孤となり、的には父の墳處を知らず。其の塋地を知らざるに非ず。微在は笄年に梁紇に適ぎ、幾くも無くして、老に死なる。是れ少き寡なり、蓋し以つて嫌と爲し、送葬に従がはず。故に墳處を知らず、遂に告げざるのみ、之を諱むには非ざるなり。

と言っている。つまり梁紇の妻の微在は若くして寡婦となつた爲に、恥ずかしく思つて、夫の葬列には参加しなかつたといつのである。そのために夫の墓が何処にあるかを知らず、またそのために息子の孔子にも教えることが無かつたというわけである。普通に考えて妻が夫の墓所を知らないというのはおかしい話ではある。それにまた、知らないのをそのままにして、自分の息子にも知らせなかつたのである。それにしても孔子一族にまつわる話の中には不思議なことが多い。妻は何故夫の葬送に加わらず、その墓も知らず。のみならず知ろつともしない。それはなぜか。梁紇は防山に葬られたといふ。この防山といふところはどこいうところであつたのか、そこに、妻の態度を解く鍵があるような気がする。防山は恐らく普通の人が葬られるところなのではあるまい。それは特殊な身分の人が、或いは特殊な職業につく人々が葬られるところであつたに違いない。つまりそのためにその妻は、葬列にも列せず、その墓にも行かず、その場所を知ろつとも思わなかつたのであろう。そしてそれを息子に知らすことは息子自身の恥になるとも考えたのであろう。

さて次に『孔子世家』は、孔子が子供の時は、「常陳俎豆、説礼容」であつたと述べている。「俎」とは俎板状の板に足をつけた台のようなもので、「豆」とは筒状の上部が皿の形になっている高台である。『正義』では、

俎豆以木爲之、受四升、高尺二寸。大夫以上赤雲氣、諸侯加象飾足、天子玉飾也。

俎豆は木を以つて之を爲くり、四升を受け、高さ二寸。大夫以上は雲氣を赤くし、諸侯は象を加え、足を飾り、天子は玉飾なり。

としている。つまり孔子は子供の頃、いつも神や、死者にものを捧げる時に用いるいわば奉げ台などを並べて遊んでいたといつのである。このことの意味について、これは孔子の一族が、死者を弔つことを職業としていたといふことであり、孔子一族が当時のそういう職業につくべき身分、階層に属していたのである。としたのは白川静であつた。この考えは今まで、上部で述べてきた事と考え合わせて、ごく自然にうなづける。「設礼容」と言つのは、恐らくそうした遊びの最中でも、孔子はいつも正しい典礼における儀礼の形を守るつとして、子供ながらのやり方ではあつたが、形は整えていた、といふのであろう。そうなると益々白川説は的を射ているように思える。また母親が亡くなつたときは、五夫之衢、つまり町の四辻のような所で、もがりの儀礼を行つたと言つのである。つまり通常なら、屋内に遺骸を安置して行ふはずの御通夜の儀式を、屋外の街頭で執り行つたのである。そしてこれは「蓋其愼也」と、司馬遷は表現して、「つつしみの結果である」といふのである。『索隱』も、こ

れは「謹んでやった事である」として、次のように注している。

謂孔子不知父墓、乃且殯其母於五父之衢、是其謹慎也。

孔子父の墓を知らず、乃ち且に其の母を五父之衢に殯するは、是れ其れ謹しみ慎しむなり。

また「慎」について『正義』は次のように忠を施している。

慎謂以紼引棺就殯所也。

慎とは、紼を以つて棺を引き、殯所に就くを謂ふなり。

「佛」とは引き綱のことである。

何ゆえにそんなことをしなければならなかったのか。このことも孔子一族の属していた身分や職業と関係しているであろう。また其の時になって、初めて父親の墓の場所がわかったのであるが、それは孔子と同郷の陬の人、「輓父」という者が孔子に教えたからであつた。この「輓」と言つのは「引く」の意味で、「挽」と同じく人の死を悼む意味を持つている。即ちこの人物も孔子一族と同じ職業で、死者を弔うことを其生業の一部としていたのかもしれない。

以上、孔子一族の身分と職業、即ち孔子をとり巻いていた社会的な人間関係としての環境、がどのようなものであつたかがある程度想定することに努めてきた。そこから考えることが出来るのは、孔子という人物は常に死者と近い関係にあつたということであり、常に死者と向き合つていたということである。言つなれば、ここに孔子の思想の原点があるのではないかと考えるのである。即ち孔子の思想の基は、死者にいかに接するか、死者にいかに対するかとい

う発想無しには考えられないのではないかと思つのである。

（二〇〇一年十二月二十一日受理）